



現代意訳 華嚴経 新装版

原田霊道

書肆心水

SAMPLE
S - Shinsui.com

目次

解説

寂滅道場会

第一 世界の喜び（世間浄眼品）
第二 信仰の対象（盧舎那品）

蓮華藏世界と普莊嚴童子

四七

普光明殿会

第三 仏陀の名称（名号品）
第四 四諦の命辞（四諦品）
第五 仏の光明（如来光明覚品）
第六 疑問の解決（菩薩明難品）

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

一六

二六

四二

五三

五五

五七

六〇

第七	信仰の實際化（淨行品）	六
第八	信仰の力（賢首品）	六

忉利天会

第九	妙勝殿の集い（仏昇須弥頂品）	七
第十	理解の生活（妙勝殿上説偈品）	七
第十一	理解の階梯（十住品）	七
第十二	発心と真証（梵行品）	七
第十三	仏道志願の力（初発心功德品）	八
第十四	理解より実行へ（明法品）	八

夜摩天宮会

第十五	体験の生活（夜摩天宮自在品）	六
第十六	体験の力（菩薩説偈品）	七
第十七	体験の過程（十行品）	七
第十八	体験の内容（十無尽藏品）	六

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

兜率天宮会

第十九 兜率天の集い（一切宝殿品）……………100

第二十 仏徳の讃頌（菩薩雲集讃仏品）……………101

第二十一 回向の生活（金剛幢回向品）……………105

他化自在天会

第二十二 真証の生活（十地品）……………114

序 事

摩尼宝殿の集い 二二五

聖者金剛蔵の靈徳 二二六

正法の尊貴 二二八

仏の加護 三三三

一 入道の喜び（歡喜地）

無限向上の学道 二二六

入道の喜び 二二七

心地の浄化 二二八

聖者の十大願 二二九

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

布施の徹底	二三
真証の第一相	二三六
二 三業の浄化（離垢地）	
会衆の讃仰	三三八
十種の真実心	三三九
十種の善道	三四〇
三乗の十善道	三四一
十悪の思念より救済へ	三四三
真証の第二相	三四五
三 真相の達観（明地）	
会衆の讃仰	三四六
十種の深心と現象の達観	三四八
求法の熱誠	三四九
八種の精神修養法	三五
真証の第三相	三五三
四 真智の熾烈（焰地）	
人天の讃仰	三五五
十種の実体観	三五六
三十七科の修養法（三十七道品）	三五八
精進の種々	三五九
真証の第四相	三六一
五 霊徳の増勝（難勝地）	
会衆の讃仰	三六一

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

現象の平等	一六二
四種の真理（四諦）	一六三
教化の手段	一六五
真証の第五相	一六六
六 自由の顕現（現前地）	
会衆の讃仰	一六六
十種の平等観	一六九
万有の生成観（十二因縁）	一七〇
三種の自由境（三解脱門）	一七四
真証の第六相	一七六
七 靈能の發揮（遠行地）	
会衆の讃仰	一七六
十種の妙行	一七九
諸地の比較	一八一
無限の靈能	一八四
真証の第七相	一八六
八 無慾の活動（不動地）	
会衆の讃仰	一八八
真理の体得	一九〇
無慾の活動	一九〇
国土の浄化	一九二
生類の浄化	一九三
万有即ち仏身	一九四
智徳靈能の優越	一九五

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

不動の名に就て 一九六

真証の第八相 一九七

九 完全なる智慧（善慧地）

会衆の讃仰 一九九

教導者の学行 二〇〇

教化の完全 二〇四

万霊の大指導者 二〇六

真証の第九相 二〇七

十 靈光洋々（法雲地）

会衆の讃仰 二〇九

学行の成就 二一〇

仏位継承の儀 二一一

靈光洋々 二一四

法雲の名に就て 二一六

仏と聖者の靈能 二一七

真証の第十相 二二一

海と山と摩尼珠との喩え 二二三

聖者の証明 二二五

第二十三

真証の徳能（十明品・住処品）

十種の知力（十明品） 二二七

十種の智体（十忍品） 二二九

数量と徳能（阿僧祇品） 二三〇

時（寿命品） 二三三

処（住処品） 二二三

第二十四 仏陀の聖徳（不思議品—小相品） 二二三

仏のみすがた（如来相海品） 二三六

仏の光明（仏小相品） 二四〇

第二十五 普賢の学行（普賢行品） 二四三

第二十六 正覚の内容（性起品） 二四六

普光明殿会

第二十七 普賢の復説（離世間品） 二五五

重閣講堂会

第二十八 真理体得の道（入法界品） 二六二

祇園精舎の集い 二六二

求道の旅 二六四

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

本書の表記等について

- 一、本書の底本は、原田靈道訳著『現代意識 華嚴經』大正十一年三月、仏教経典叢書刊行会発行（非売品）である。
- 一、底本は旧漢字・旧仮名遣い表記であるが、本書では新漢字・新仮名遣い表記に置き換えた。別体抜いの漢字は標準字体で統一的に表記した（例、慚↓慚）。
- 一、送り仮名が現今一般の感覚で読みにくいと考えられたものは適宜現代風に加減した（例、名ける↓名づける、明か↓明らか）。送り仮名の不統一があっても、さほど読みにくいと思われないものはそのままにしてある（例、尚／尚お）。
- 一、踊り字（繰り返し記号）は「々」のみを使用した。
- 一、底本の印刷欠字は□であらわした。
- 一、底本の読み仮名ルビのほかに適宜読み仮名ルビを補った。底本にある読み仮名ルビはすべて採用してある。
- 一、正誤を判断しかねる記述などに用いる、原文のままを意味する「ママ」のルビと校閲的註記は、（ ）で括って（ママ）のように表記した。
- 一、些細な不統一はそのままとした（例、いんたら／いんどら）。
- 一、底本で丸括弧内が小活字になっているところはその通りに表記した。
- 一、底本では「波羅密」「婆須蜜多」の表記であるが、これは「波羅蜜」「婆須蜜多」と表記した。
- 一、現今一般に漢字表記が避けられて難読扱いとなったと考えられるものは平仮名表記に置き換えた。置き換えたものは五十音順に次の通り（送り仮名は代表例のみを示す）。
 - 亜細亜（↓アジア）、聊か（↓いささか）、愈々（↓いよいよ）、況や（↓いわんや）、印度（↓インド）、茲（↓ここ）、此の（↓この）、之れ（↓これ）、是れ（↓これ）、此れ（↓これ）、抑々（↓そもそも）、屢々（↓しばしば）、乃ち（↓すなわち）、乃で（↓そこで）、其（↓その）、假令（↓たとい）、勿れ（↓なかれ）、亦（↓また）、若し（↓もし）、齋す（↓もたらす）、纒か（↓わすか）

現代
意識

華
巖
経

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

凡例

一、華嚴経は仏教の經典の中で、最も浩瀚なもので、然も殆ど象徴寄頭の表現形式をもって終始しているから、その帰趣を捉えにくい。卒然としてこれに接する時は、荒誕無稽の夢物語を見るの感がある。然し精読沈思一たびその表現せんとする経の原意に触るれば、その雄大な結構と高遠な哲理と深刻な宗教的体験とに思わず、驚異の眼を睜みはるであらう。いま訳する処は量に於て二十分の一にも足らず、ただ結構梗概を述ぶるに止まって、殆ど中心の思想さえ現わし得ないことを心から遺憾とする。

二、本書は「六十華嚴」に拠り、「十地品」を中心として、前後の各章は同品の内容を補い、一経の梗概結構を示す程度に、極めて大胆な抄訳を行った。故に「十地品」は前文を繰り返す偈を除く他は、殆ど漏さず訳した。「四十華嚴」の最後の一節は経の中心思想に重大な関係があると信じて、これを終りに附加しておいた。

一、観察体験の浅深精粗を表わす三昧や、宇宙の実体即ち仏身を表現する種々の相を訳すること
を避けながら、無限無尽を表わす十数を、時に略するなど、態度の不統一は訳文の拙劣と共に、
筆者自身も鮮^{すく}なからず不満足である。

一、本經典は一面、偉大な象徴文学で、言々句々に深大な意義を含ましているから、本書の如き
形式が、経の精神を現わすに不適當であることは言うまでもない。筆者は自己のその器にあら
ざることを告白して、本書が玉を瓦としたことを衷心より慙愧している。

本書に就ては文学博士椎尾弁匡先生が深い同情をもって、種々御指導下さいました。本書
が幾分でも本叢書刊行の趣意に副うところがあれば、それは総て先生の指導の賜である。
ここに謹んで感謝の意を表す。

大正十一年二月

原田靈道識

SAMPLE
Shoshi-Shinsu.com

解 説

一

華嚴経は釈尊自覚の内容を明らかにする經典である。故に釈尊の成道を主題として成道後二七日に菩提樹下寂滅道場を始め、七処に於て説かれたとするのは表現の一形式で、実は宇宙に遍満して、時に束縛せらるべきものでない、万象はすべて華嚴経の内容を語るものである。

華嚴経の精神を最もよく發揮した賢首は、この旨を明らかにする為めに、華嚴経に広略六種の別（著書によって異なる、今は「探玄記」に依る）を見て、その内容の広漠なることを示した。その始めの「恒本」は、宇宙を挙げて常恒不斷に仏の正覚を語るものとして、山川河海を悉くたつと仏陀正覚の内容即ち華嚴経とするのである。これが真の華嚴経で、仮りに文字に表わして大本、上本、中本、下本、略本等とするも、その下本にしてなお十万頌もあり、支那に翻訳された吾々の手にする六十卷、八十卷の経は最後の略本であると。もってその内容を知ることが出来る。この經典論は最もよく仏教經典の本

質を表わしたもので、華嚴経に限らず総ての大乗経典に就て論ぜらるべきことである。

華嚴経が宇宙の全的活動を内容とする仏陀の自覚を顕現するものとすれば、その内容は念々に拡大され、充実さるるもので、決して六十、八十乃至十万頌に限らるべきものでない。故に華嚴経は単に第一説法として、釈尊一代の教説を該撰するのみでなく、未来永劫を尽して、人類救済の指導たる思想は悉く仏陀の自覚としてこれを包含するものである。

これ文字に表わし、口に述べるときは、その意義を限定するものであるから、これ等によって無限の内容を説明することは出来ない。この意味は経典の至る処に現わされて、仏は一事項の説法を終る毎に、必ず「無量の時を費すも、遂に説き尽されない」と繰返してある。故に吾々は華嚴経を読み、これを体験するに、「これぞ華嚴の内容、これぞ仏陀の自覚」なりと、限定的に思惟してはならぬ。すべての経典は「恒本」華嚴経の片鱗隻影なりと思うべきである。

二

華嚴経は詳しくは「大方広仏華嚴経」と云い、原名をマハーバイプルヤ・ブツダ・ガンダ・ビユーハ・スートラ (Mahāvaiṣṭya Buddha-gaṇḍa vyūha sūtra) と云う。西蔵訳にはアバタムサカ (Avatamsaka) とし、ニポールの本はガンダビユーハ (Gaṇḍa-vyūha) となっている。

大方広には種々の意義を含むも、要するに広大無限の意味、仏は理想を示し、華は自性清浄の心(大宇宙の実体)を表わし、嚴は実行体言すること、故に「無限広大の宇宙の実体を学行し、体現するみ

教え」と云うことである。

この經典の成立年代に就ては明確の知識をもっていない。ただ釈尊の滅後、五百年頃（西曆第一世紀）より盛んに行われた仏教の復興運動に伴う産物であることは想像される。釈尊の滅後、流れを汲むものの情として遺法を重んじた結果は、表面の規律に拘泥してその精神を忘れ、ただ遺法の分析解釈を事とするに至った。次でこの仏説細分の結果は知識の分析を重んじ、現象の分析論議によって宇宙人生の総ての問題を解決し得るものとして、遂に仏教の本質である成仏さえ否定するに至った。これが哲学的にも宗教的にも仏教を偏狭に低級にした所謂小乗教である。この偏執を打破し、仏陀の眞精神を發揮せんがために、大乘仏教の復興運動は起り、而して幾多の經典論書の著述編纂は行われたのである。本經典の如きもその時代の偉大な仏教の思想家が仏教の本義を明らかにせんとして、仏陀自覚の内容を開顕せられたものであろう。

この經の成立地に就ては支那翻譯の歴史より推論して、于闐 (Khotan) と云われているが、于闐國の歴史及びその仏教を語る唯一權威である西蔵文于闐國史（西紀一一八三の著述）には、何等華嚴に關する記述を見ない。果して何処にて成れるや淺学の身の知るよしもない。

三

華嚴經の支那翻譯は仏教が伝わって（西紀六七）間もなく、支婁迦讖（翻譯期間西紀一四七―一八六）によってなされた經の「名号品」に當る兜沙經の訳出に始まる。爾後数代に亘って行われ、賢首

の「華嚴伝」（華嚴の歴史）には三十五部の多数が列挙してある。然しこれ等は経の一章（品）又は一部分の抄訳で、完本ではない。その現に存するもののみが、二十四部もある。いまは煩を避けて華嚴経の中心をなす「十地品」と「入法界品」との異訳を挙げよう。

漸備一切知徳経	五 卷（十地品）	西晋	竺法護
十 住 経	十三卷（同上）	西晋	聶道真
十 住 経	四 卷（同上）	後秦	鳩摩羅什
十 住 経	九 卷（同上）	唐	尸羅達摩
仏説十地経	三 卷（入法界品）	西秦	聖堅
羅摩伽経	一 卷（同上）	東晋	覚賢
文殊師利発願経	一 卷（同上）	唐	日照
大方広仏華嚴経入法界品	四十卷（同上）	唐	般若三蔵
華嚴経普賢行願品	一 卷（同上）	唐	不空
普賢菩薩行願讚	一 卷（同上）	唐	不空

完本の訳出は前後二回のみである。

一、大方広仏華嚴経 六十卷

北天竺の人、仏駄跋陀羅 ぶつたぼたら Buddhahadra—覚賢（西紀三五九―四二九）が、楊都道場寺に於て、
 義熙十四年三月（四一八）に業を始め、元熙二年六月（四二〇）に訳了した。

二、同

八十卷

于闐の人、実叉難陀 *Śikṣinanda*—学喜（西紀六五二—七一〇）が京都大遍空寺に於て、唐の証聖元年三月（六九五）に訳を始め、聖暦二年十月（六九九）に了る。

前者を「六十華嚴」、又は「晋経」と云い、後者を「八十華嚴」、又は「唐経」と云う。「四十華嚴」と云わるるものは支本で、前に掲げた「入法界品」の異訳中、般若三蔵訳の「華嚴経普賢行願品」を指し、完本ではない。これをまた「貞元経」と云い、ニポール国の九部大経中の華嚴経はこれである。

華嚴経の原文としては今僅かにその一部分しか残つて居らぬ。完全のものとしては十地品 *Daśabhūmisvara* と「入法界品」 *Gaṇḍavyūha* 丈じ、それに後者の結文である六十二頌の「普賢行願賛」 *Bhadracariprañihāna* が単行本として現存して居る。然し一部分としては「賢首品」の大部分の偈頌が「大乘集菩薩論」 *Śikṣā Samuccaya* の中に引用されて、原文の佛を窺うことが出来る。

これ等原文の古写本は、パリの国立図書館（ブリオテック・ナショナル）や英国の皇立アジア協会文庫、ケムブリジ大学文庫、カルカッタ・アジア協会書庫等に多数珍藏され、就中英京アジア協会蔵の「行願品」梵本は西曆十世紀頃の書写で非常に有名なものである。吾国にも東京及び京都の大学に高楠樞両教授の尽力でこの二品の梵本が備えられるに至った。

西藏蔵経の経部に於てもこの経の訳本が、該部第三門 *Pañ-chen* として六函二千二百葉の浩瀚な大冊となって収められて居る。新訳華嚴（唐経）の三十九品に対し四十五品の分章であるから、内容は多少増減があることが分ろう。

四

同じく完本なるに、晋経は六十卷三十四章、唐経は八十卷三十九章より成り、兩経の巻帙章品に相違がある。また説法の会場に就ても前者は八会えなるも、後者は九会である。これは唐経は晋経に於ける盧舎那品の一章を五章に開き、更に「十地品」の次に「十定品」の一章を加うるが故に晋経に比して五章を増加し、また十定品の始めに「普光明殿に於て」とあるによって、以下の十一品を十地品と別の一会として、九会とするのである。いま六十卷の経によってその組織を概観しよう。

本經典は説法と云わんよりも、仏陀の自覚の内容を戯曲的結構をもって、表現したものである。その結構は八場より成り、一場毎に主人公を異にしている。いまこれを図示すれば、

第一場	寂滅道場	二章	(世間淨眼品、盧舎那品)	普賢
第二場	普光明殿(一)	六章	(名号品、四諦品、光明覺品、明難品、淨行品、賢首品)	文殊
第三場	切利天宮	六章	(須弥頂品、妙勝殿説偈品、十住品、梵行品、初發心觀尊功德品、明法品)	法慧
第四場	夜摩天宮	四章	(夜摩天宮自在品、夜摩天宮説偈品、十行品、十無尽藏品)	功德林
第五場	兜率天宮	三章	(一切宝殿品、菩薩讚仏品、十回向品)	金剛幢
第六場	他化自在天宮	十一章	(十地品、十明品、十忍品、阿僧祇品、壽命品、住処品、不思議品、相海品、小相品、普賢行品、如来性起品)	金剛藏
第七場	普光明殿(二)	一章	(離世間品)	普賢
第八場	重閣講堂	一章	(入法界品)	善財

説会としては、かく八場なるも、普光明殿は二回、使用されているから、所としては七処で、これを人三天四の七処と云い、通常、華嚴經の説相を、晋經は七処八会、唐經は七処九会と云わるる所以である。

各場に活躍するあまたの人物は、悉くことごと仏陀るしやな盧舎那(釈尊)の性能を人格化せるもので、当然、盧舎那仏に統一せらるべきものである。故に表面殆ど仏陀の活動と見られないが、その背景には常に法身盧舎那仏が活躍している。それは經典の一の事件を叙するに、必ず「仏の神力みちからを承けて」と云うによつても、容易に首肯されよう。また人界より天界へと、場面の变化し行くのは、無限に眞実を求めて止まぬ向上心の進展を表現するものである。

五

各章の梗概と前後の関係とは、その章の始めに簡短ながら述べたから省略してここにはただ一經の歸結に就て一言しよう。第一場は仏陀の正覺成就によつて宇宙は新しき生命を得る、即ち宇宙を挙げて仏陀たるの相を明らかにし、第二場には信仰を讃えて発心求道を勧め、第三場には理解の法を説き、第四場には実行を、第五場には一切の行為の統一回向を述べ、第六場には眞証の生活を明らかにし、第七場には信仰理解、実行、回向、眞証の内容を再び概説し、第八場にはこれ等の聖者の学道を体現する善財童子の求道の旅が叙してある。すなわち要は信解行証の四に概括される。この叙述は浅深次第して絶対に対する吾々の向上進趣を明らかにするものである。華嚴經が単なる哲学として觀念の遊

戯に終るならば止まらんも、常に宇宙万象をあげて仏陀たるの実感を主張し、発心求道の現実生活に正覚の円現を期する華嚴経にては更に一步を進めねばならぬ。絶対と吾人との合一は唯信仰の体現にある。故に「入法界品」の最後に、自他の無限の向上を永劫に念願し、修行する本願仏たる阿弥陀仏に帰依すべきことを教えたるは実に華嚴経に千鈞の重きを加うるものである。これ宗教の実践としてはこの経を逆観せよと主張さるる所以である。

かくて信解行証の四は遂に自己の真実求道の一心に帰結さるべきである。真実求道の一心は内的には仏陀の自覚、仏陀の自覚は現われて宇宙の万象となる。即ち自他一切の差別、あらゆる隔歴不同を去り、自他相依り相助けて各々その生を完うする渾然たる一体としての大自然の活動、これが吾が一心となり、仏陀とならねばならぬのである。

寸時の撓みもなく、無限に自他の向上を念願し、実行するこの志願は、やがて、阿弥陀仏が一切の生類を撰取し尽さんとする本願である。実にこの無限向上の学道こそ、万有の永遠不滅の生命である、宇宙の本性である。ここに理想と現実との一致がある。

万有の協調偕和する法界の風光を掬うものは、そこに偉大な力を感じ、報恩感謝の無私の活動が現われる。

六

本経典は所謂法界縁起を説くものである。即ち一切の現象が互に踏融して、無礙の関係を有するこ

寂滅道場会

第一 世界の喜び（世間浄眼品）

釈尊の正覚によって宇宙は一変し、一塵一草も無限の生命と力を得て、万有は新しい生活に入った。そして、万有は互に偕和してそこに何等の背反も撞着も見られない。この有様を諸宝の莊嚴と、人天鬼神の讚頌とで表現してある。

釈尊は摩竭提国の寂滅道場に於て、始めて正覚を成就せられた。

その時、大地は金剛の如くに、周囲は宝華に飾られ、瑞雲は万象を覆うてさながら大海原の如くであった。宝幢、華鬘は光明に輝き、空には七宝の網が張られ、宝の雨は小やみなく降り続いた。仏の神力によって世界は限りなき靈光に照らされて広博敞麗の様は云いようがない。また菩提樹は空高く

世界の喜び(世間浄眼品)

聳えて、瑠璃の幹には妙宝の枝葉が垂れて重なれる雲の如く、宝華はその間に咲き乱れ、枝葉の間からは妙なる音楽が漏れて仏徳を讃えている。樹下の獅子座はまた海の如く広がり、諸の宝華に飾られ、流光は雲の如く、不思議の靈能を現わして一念の頃に法界に充滿した。

釈尊は実にこの獅子座上に於て万有の真相を体解せられたのである。その智慧は三世の諸相に通達し、体は宇宙の万象と現われ、その音声は一切の世に透徹して共に窮極のないことは虚空のようである。また常に偏頗の心を捨てて等しく一切の生類を正覺の境地に導き、宝座を立たずして一切生類の能力に相應しい教えを説いて、諸の痴闇を除いている。即ち一切の世界に身を現わして三世透徹の智慧の光を十方に輝やかし、仏の靈徳に基づく永遠不滅の眞実道を説いて、生類を濟度せらるるのである。仏は座を立たずに広く教化を行い、また諸仏の大会に参ずるも、身は宇宙法界に遍滿するが故に、往復去來の相を示す必要がない。

時に十方の世界より微塵数の如く多くの大聖者が出現して釈尊を圍繞した。普賢、普徳、智光、普明師子、普勝宝光、智慧光照などがその主なものである。これ等の聖者は往昔、盧舎那仏——釈尊——と俱に学行を精進された宿世の善友で、既に諸の学行を成就して智慧の眼は三世の万有を見透し、弁才は海の如く広く、普く諸仏の靈徳を説いて生類の能力に應ずる教化を全うするものである。この聖者達はよく一切万有の眞実相に体達するが故に、念々に仏道を成就して一切の眞理を体得し、一行の成就によって一切の聖徳靈能を成熟して、無上の大智大願を完うし、仏の大悲行、福德、十力等を得て、生類の教化に於ても万有の認識に於ても仏と異るところはない。故に一切の世界に遊び、永劫絶

ゆるることなき「救いの智慧」をもって、国土を浄化し、生類を済度している。

また微塵数の金剛力士は釈尊を守護し奉った。堅固光耀力士、日光耀力士などがその主なるもので、永劫の昔、諸仏侍衛の大誓願を発し、無量の徳能を具えて仏の護衛に任じている。また微塵数の浄莊嚴、宝積光明、吼音声など云う道場神、摩尼光竜、難莊嚴竜など云う竜神、淨華光、善思光、雜華莊嚴など云う地神、雜華雲、雜種光、淨勝光など云う樹神、光炎、梅檀香など云う菓草神、勝味、華淨、善力など云う穀神、普流、勝廻復、洪流声など云う河神、宝勝光明、普涌浪、海音声など云う海神、熾然光蔵、広明耀、照除諸冥など云う火神、無礙照明虚空、散須弥、持世界など云う風神、無辺深広、起風など云う虚空神、善住、充滿など云う主方神。妙光、善觀衆生など云う主夜神、大悲豔光、光明善照など云う主昼神、羅睺羅王、勝集天女王など云う阿修羅神、持法堅固、勇猛淨眼など云う迦留羅王、離愛慢音、善愛など云う緊那羅王、猛光、善慧など云う摩睺羅伽王、能除恐怖、無量淨眼など云う鳩槃荼王、毗沙門、莊嚴勝軍など云う鬼神王、月天子、星宿王天子など云う月身天子、日天子、明眼天子など云う日天子、帝釈天、勝者など云う三十三天王、善時、普莊嚴など云う夜摩天王、善喜、金剛善曜など云う兜率王、最上雲音、照方など云う化樂天王、自在転、精進慧など云う他化自在天王、随世音大梵、尸棄大梵など云う大梵天王、樂光、深妙音など云う光音天子、淨智王、世慧音など云う遍淨天、法華光、無垢淨など云う果実天子、功德淨眼、不動光音など云う淨居天等皆来会して、その壯嚴雄大は言葉に尽せない。

これ等宇宙万有を代表するものは本来、清淨なる平等一相で、悉く仏の真証を現わしている。已に

世界の喜び(世間浄眼品)

仏の真証の中にあれば各々もまた一切の煩惱を離れて、ゆくりなく仏の尊容を拝し、日夜に精進する学行によって、仏の光明に浴して各々真理を体得した。かくして仏の霊徳を讃える歌頌は響いた。始めに善光海大自在天は、

『縦横無尽の關係をもつ一切万有は、総て仏の身となり肉となる、仏の証りは執すべき相、起すべき特殊性はない。』

仏はただ万有の協調偕和の帰一として世に表わされる。一切世俗の智慧は仏を認識することは出来ぬ。愚痴の闇を除いて、始めて無上の智慧の台に超昇する。仏の霊徳は思議し難い、生類これを見れば煩惱滅び、無礙自在の尊容を見たてまつれば無量悦樂の心が生ずる。』

果実天は讃えて、

『万有真実の相は無差別にして主体はない。仏は生類教化のために現われ、神秘の力もて善く一毛孔の処に、無上清浄の法を演説し給う。』

浄智天は云う、

『仏の教化は時に限りなく、光は広く十方を照らす、清浄の法界は万有のあるがままなれば、無差別にして最上である。』

光音天は言う、

『如来の智慧は限りなく、行には差別がない。これを見奉れば垢穢を去る。』
大梵天は讃えて、

『法王は真理の堂に安住して光明の照らさない処はなく、諸法は相和して異相がない、これを海潮音の法門と云う。』

化樂天は歌う、

『手段を尽して仏を求めれども仏は居られない、これを十方に訪ねてもいませず。

法身は示現するも定在がない、かくて我等は出世自在の仏を見る。』

兜率天は言う、

『世間最高の主は群生を憐み苦を除き、人観たてまつらんと楽わば、み姿を現わして高嶺の月の如くである。』

夜摩天は讃えて、

『人一たび仏を見ればよく総ての煩惱を断ち、諸の魔事まごころを除く、これを清浄の妙境と名づける。』

帝釈天は言う、

『もし暫くでも仏を憶念すれば一念尚お永く罪の世界を脱れて、智慧は日の光の如く痴闇を滅さん。』

日光天は言う、

『愚昧の人は盲目である。この悩めるもののために浄眼を開き、彼等に智慧の灯を示して、仏の清浄身を見せしマツみらるる。』

月天子は言う、

『一切の存在は空の如く実体はない、心清浄なるものは仏の光明を仰ぎ、その教化を受くる。』

世界の喜び(世間浄眼品)

毘沙門夜叉王は歌う、

『凡ての生類は罪深うして永劫に真理を見得ない。仏はその流転の苦を憐みて世に現われ給う。』
金剛力士は歌う、

『仏の無礙の靈能は一切法界に充滿している、真理の光は際崖なく、一切生類の前に現わるる。』
最後に普賢は一切の会衆に代って、

『仏は吾等が、この獅子宝座の上に見奉るように、一分の微塵の中にもいらせらるる。

十方一切の世界は仏の等しく護らせらるるところで、仏のみ声は一切に徹して聖者の学行を演べらるる。

念々に生滅変化する万有の真相は、局限された認識の及ぶところでなく、唯一切の制限を離るるもののみ見ることが出来る。

仏は一音をもって一切の学道を説いて、一切の法を漏らすことはない。』

時に仏の獅子座より海慧超越、無量獅子吼など云う無数の菩薩が湧出して、諸の供養を捧げ、一切海慧自在智明王菩薩はこれ等の聖者を代表して、仏の正覚を讃える。

『仏は万有の真相をさとって、一切の拘束を離れ、浄きことは虚空の如くである。永劫の間の学行は成就せられて、今や一切の迷いを除くために種々の教化を施し、生類に最上のみ教えを説き、これを行わしめらる。』
仏陀は獅子の宝座にいまして、よく一切の世界に現われて、限りなきみ教えを顕揚せらるる。』

斯く宇宙を挙げて仏の正覚を讃仰し、世界は六種に震動した。諸天は妙華、宝雲を雨ふらして仏に供養を捧げた。今や仏の正覚によって万有は、各々光明の世界を見出し、そこに何等の制限を受けぬ麗しい正覚の新天地は展開された。

第二 信仰の対象（盧舎那品）

普賢（ふげん 聖者） 華嚴經の理想人格で、經中に現わるる幾多象徴的人格の実行的方面は悉くこの人に統攝される。故に華嚴經は普賢に終始するの觀がある。

普莊嚴童子（ふしょうどうし 求道者） 華嚴經の三童子の一で盧舎那仏の前身。信を人格化せるもの。唐訳には大威光童子と云う。

世界を挙げて仏身とするのが華嚴經の本意であるが、それでは余りに散漫で歸一がない。故に仏の最も円満なる相を示して、信仰の対象を表示するのが以下の四章である。この章には主としてその住む国土を明らかにし、仏身の宇宙に遍満することは多く化現説を以て表わす。これは直に我れに仏身を体験せんことを教ゆるものである。

仏が正覚を成就せられたのを見て、群り集った大衆は心に念うよう、

『仏陀の心地はどうであろう、仏の世界はどんなであろう、智慧、力、光明、音声などの仏の聖徳靈

信仰の対象（盧舎那品）

能、利他教化の対象、方法、効果は如何であろう。また正覚を成就さるる迄聖者として修められた学行と心地はどうであつたらう。仏の慈悲にすがつてこれ等の真相を知りたい』と。

この念いは自然の声として種々の供物より発せられた。

時に仏はみ口の一一の齒の間から微塵数の光明を放つて、十方の世界を照らされ、その世界の人人は光の中に蓮華蔵世界を見ることが出来た。

蓮華蔵世界の周囲には十種の世界があつて、その中に各々仏の世界がある。東の世界を淨蓮華勝光莊嚴、仏国を衆宝金剛蔵と云い、種々の宝雲に覆われ、仏を法水覚虚空法王という。南の世界を衆宝月光莊嚴蔵、仏国を無量光嚴と云い、種々の宝雲に覆われ、仏を普智光勝須弥山王と云う。西の世界を宝光樂、仏国を一切勝現と云い、種々の樓閣雲に覆われ、仏を香光王功德法莊嚴と云う。北の世界を瑠璃宝光充滿蔵、仏国を化青蓮華莊嚴と云い、種々の宝雲に覆われ、仏を無量智慧音王と云う。東南方の世界を閻浮玻璃色幢、仏国を宝莊嚴蔵と云い、種々の獅子座雲に覆われ、一切法灯無所怖畏と云う。西南方の世界を普照莊嚴、仏国を香勝離垢光明と云い、種々の宝雲に覆われ、一切衆生普歎喜王と云う。西北方の世界を善光照、仏国を意入と云い、種々の蓋雲に覆われ、普門智慧明淨音と云う。東北方の世界を宝照明蔵、仏国を香莊嚴樂勝蔵と云い、同じく宝雲に覆われて、仏を無量功德海と云う。下方の世界を蓮華妙香勝蔵、仏国を宝獅子光と云い、種々の宝雲に覆われ、仏を明照世界と云う。上方の世界を雜宝光海莊嚴、仏国を樂行清淨と云い、宝雲に覆われ、仏を無礙功德称離闇光王と云う。

SAMUELCHRISTIAN.COM

これ等十方の仏はその国の無数の聖者を従えて、寂滅道場に来り、各々獅子座に坐して一切の毛孔より光明を放ち、生類を教化して盧舎那仏の真証海のものとなせらるる。

諸の聖者はこの仏の教化を讃えて、

『仏は諸の生類を教化せんとて、具さに清淨の学道に努しみ、救いの慈悲は一切の万有に光被して限りがない。教化の方法は一毛端の処によく仏の世界を表わして、よく生類の憂悩を除き、各々の微塵に現わする身は、また一切を淨化して一念に一切を成就する。』

時に積尊は凡ての大衆に仏の限りなきみ教えを知らしめんと、眉間の白毫相より光明を放たれた。

その光は広く一切の世界を照らして、生類に甘露の雨を注いだ。また光明の中に宝香を鬚とし、黄金を台とする大きな蓮華が現われ、その葉は遍く一切の法界を覆うている。この蓮華と共に仏の額より一の聖者が現われた。その名を一切法勝音と云い、微塵数の聖者と共に仏を繞つて深重な敬意を表し、そして勝音は台に聖者達は鬚に座を占めて、次第に仏の聖徳を讃える。

始めに勝音は、

『仏のみ体は法界に充滿し、現に菩提樹にいまして、よく一切生類の望みにまかせて種々の相を現わさるる。』

師子炎光奮迅音は讃えて、

『仏は清淨なるみ教えを説いて、一切の世界に洩く、普賢大士のみ声も一切の世界に満つる。盧舎那仏はあらゆる妄染の中にあつて秋毫の動揺もなく、常に自ら成就せる学行を説かるる。三世の仏もま

信仰の対象（盧舎那品）

た声をもって生類を教化する』と。

かくてこの寂滅道場に於けると同じ瑞相は、宇宙至る所の世界に現わされた。

普賢大士が仏のみ前に於て浄蔵三昧に入られると、十方一切の諸仏はみな普賢の徳を讃えて、

『よい哉、汝がいま浄蔵三昧に心を凝しているのは、盧舎那仏の本願力と、汝が修する大願との力によってである。即ち一切の生類の能力を察し、方法を考えて教化を完全ならしめんが為めである。』

かくて普賢はこの三昧を成就して、法界の真理を証^{まじ}り、教化の智慧を得た。その時十方の仏は右手を伸べて普賢の頭を摩^なで、諸^{もろ}の聖者はこの瑞相を見て更に普賢を尊敬してその徳を称揚した。

普賢は自然界、生物界、法界の動相、生類の希望及び仏の境地などの観察を已^もって大衆に告げらるるよう、

『万有の実相、法界の真理、証^{まじ}りの智慧、仏の靈徳、教化の智慧などは総て認識の境ではない、然し予は生類を仏の智海に導く為めに、仏のみ力の下にこれを説こうと思う。』

かくして普賢が三昧より出らると共に、一切の聖者は無量の三昧^{もろ}、諸^{もろ}の学行及び教化法などを完うすることを得た。これは一切の仏の世界に於ける聖者も同様である。

時に世界は六種に動き、生類は平和と悦楽を得、道場には十種の宝王の雲が漲り、仏の光明は普賢の徳を歌頌して、

『普賢は悉^{ことごと}く一切の仏の世界にあって獅子座の上に坐し、凡ての行為は仏の願底を尽すが故に法を説くに障礙なく、生類を教化するに自在である。その身は虚空の如く真理の上において国土に依るので

ない、唯、諸の生類の意にまかせて、普く一切に示現する』と。

時に普賢は更に大衆の信念を堅くする為めに、仏の徳を讃えて、

『仏の靈徳は十方に遍満してよく無量の生類を教化する。仏の境地は幽玄にして思議し難い、多くの人は理想低く、万有に迷うて仏の真証を体得することが出来ぬ。ただ信念の固い常に善友に親しむもののみ、仏に護られて仏智を体得する。』

一切の世界も仏も共に、我が身内にあつて互に偕和している。我は一々の毛孔に仏の境地を現わすことが出来る。汝等静かに観察せよ。』

更に言葉が続けて云うよう、

『仏子よ、世界には次の十種の事項を始め無量の事項がある。』

(一) 一切の世界はあまたの因縁の和合によつて成立する。(二) 世界の依所は或は虚空或は仏の光明、或は普賢の願力など千差万別である。(三) 世界の形状はまた或は方形に、或は円形に或は渦巻くなど様々である。(四) 世界には宝華、珠香、光明、仏身など種々の体がある。(五) 世界には或は雲、或は生類の行業、或は三世の仏、普賢の願力など種々無量の莊嚴がある。(六) 世界の清浄の相はまた無量で、善友に親しみ、諸の波羅蜜を修め、正しい力を養うなど微塵数に等しい。(七) 世界には無量の仏が出でて種々の相を示さる。(八) 世界の持続する時間に就ても長短無量である。(九) 世界の変化は住するものの意志行為に依る。(十) たとい染浄相分るる如きも実は互に鎔融して、そのもの自身には染浄の差別はない。』

信仰の対象（盧舎那品）

蓮華藏世界と普莊嚴童子

普賢は仏の住処である蓮華藏世界に就て述べらるるよう、

『諸の仏子よ、蓮華藏世界は盧舎那仏が往昔、聖者として一切の時、一切の処に於て修せられた学行によつて築かれたものである。この世界は微塵数に等しい風輪によつて支えられている。最下の風輪を平等と云い、次を種々宝莊嚴と云い、乃至最上の風輪を勝藏と云い、その上に香水海がある。この香水海の中に香幢光明莊嚴と云う大蓮華があつて、蓮華藏世界を支えている。その周囲に金剛圍山が聳え、その大地に言葉に尽きせぬ香水海がある。一々の香水海にまた微塵数の香水河があつて宝華に覆われている。かく蓮華藏世界の各部は種々無量なる清浄の靈徳によつて莊嚴せられている。』

仏子よ、この香水海の中に更に一つの香水海があつて一の蓮華を生ずる。この上に仏の世界がある、更に無量の仏の世界は次第に相重つて、その上にまた香水海がある。その中に善住と云う世界の集団がある、斯く次第に香水海と世界とが相重なっている。この世界の組織は十方皆同一で、齊しく盧舎那仏の法輪を転ずる処である。』

普賢はこれ等の世界に就て述べらるるよう、
『空中の雲は竜神の力によつて現わらるるように、一切の仏国は仏の本願によつて築かる。また巧みなる手品師が種々の業を現する如く、生類の業によつて仏の世界は不思議となる。また画像は画工の手に成る如く一切の仏国は心の画師によつて築かる。』

普賢は盧舎那仏の過去の因行に就て述べらるるよう、『諸の仏子よ、久遠の昔、勝妙音と云う世界があった。無量の宝はその中に満たされ、人は思念を食物とした。』

その世界の須弥山にある大公園の東に炎光と云う大國があつて、面積は三万里、人は皆神通を得ていた。園林の中にある大蓮華に一切功德本勝須弥山雲と云う仏がいられた。炎光城の王子普莊嚴童子はこの仏に帰依し十種の三昧を得て、仏の徳を讃頌した。父の愛見善慧王はこれを聞いて喜び、諸王大臣を始め無量の眷属と共に、仏を礼して種々の供養を捧げた。

時に仏は諸の生類を教化せんがために無数の經典を説かれた。普莊嚴童子はこの經を聞き宿世の因縁によってあらゆる靈徳を具え、無限向上の菩提心を起しそして修行のさまを述ぶるよう、

「昔より幾度か耳鼻を捨て頭目手足を施して、専心、国土社会の進化に努め、永劫の間、聖者の学行を修めて仏國を莊嚴した。太陽の光が色彩を鮮やかに示す如く仏智の光によって私はいま自分のものと修行を知ることが出来た。」

この言葉によって無数の生類は悉く無限向上の志願を起した。

その時、仏は童子の成仏を予言して、

「たとい一國の中に於て修行するとも、それが限りがなければ、必ず真実智を体得することが出来る、恰度、予が成就した如うに。懈怠のものは仏の教化を解ることは出来ぬ。よく精進するもののみ仏の世界を開くものである。一切生類の為に、永劫に苦行して生死の苦難をも厭わなければ、よく

信仰の対象（盧舎那品）

大指導者となり得よう。我を恭敬し供養すれば汝は無上の学道を成就することが出来る。」

その時一切功德本勝須弥山雲仏の寿命は五十億歳であった。この仏が滅して次に出世せられた仏を一切度離痴清浄眼王仏と名づけ、普莊嚴童子はこの仏を拜して念仏三昧、普門海蔵三昧、甚深法楽三昧等を得た。次で仏の説かるる一切法界自性離垢莊嚴經を聞いて、一切普門歡喜蔵三昧を得、一切万有の真理を体得することを得た。』

SAMPLE
Shoshi-Shinsu.com

普光明殿会

第三 仏陀の名称（名号品）

文殊（聖者） 仏陀の智的性能を人格化せる者、普賢と並び称せられ、彼は実行、此は理解である。

釈尊の成仏は一切万有の成仏であるから、何ものとして仏の名ならざるはない。名体不離にして名はその徳を表示する。これ先に信仰の対象を概説したが、多くその国土に就て述べたから、ここには仏の体徳（身業）を明らかにし、次の二品と共に仏の円満な徳能を示して入信の基調を与える。

仏陀は摩竭提国の寂滅道場を離れずして、東南、約三里を隔てた尼連河の辺、普光明殿へ移られ